

# 発展への節目を迎えた中国

## (第11次5ヶ年計画期の中国)

環日本海経済交流センター長 藤野文昭

2月上旬富山県企業の中国視察団で上海、蘇州、杭州を訪れた。華東地区は中国の改革開放の象徴的中心地である。鄧小平の改革は華南から始まったが究極的狙いの本丸は上海を中心とする華東地区であったと私は思っている。地政学的に云って長江は中国の背骨でありそれを巡る地域は中国を牽引するからである。上海市を中核として蘇州市、杭州市、無錫市などが衛星都市として確実に“大上海”経済圏が形成されつつある。丁度東京経済圏に神奈川、千葉、埼玉がある様なものだ。鄧小平の改革は間違いなく中国を世界の表舞台に押し出した。東部沿海地帯の“先富論”は大いなる成功を収めたのである。しかし“先富論”には先に豊かになったものが取り残された地域の発展を導く義務という第二章が科せられて居り、今まさにその第二章の実現に向けて注力しなければならない時期に入った様だ。

今回の全人代では第11次5ヶ年計画が討議された。そして中国の国家経営に一つの大きな節目が訪れている。鄧小平の改革開放は東部沿海地帯の刮目すべき発展を齎すのと引換えに、貧富、東西、都市と農村の格差を顕在化させた。農村の不満は鬱積し一部に暴動が発生している。先富論の第二章に絵に描いた様には簡単ではないということだ。曲折の道程を辿らざるを得ないだろう。市場原理主義経済は二極分化を招くというのはいかなる社会でも同じ理屈だ。それを織込み済で市場経済化に踏み出したが思いがけない急速度で東部沿海地帯が発展した結果農村が置きざりにされてしまったということだろう。言葉をかえれば都市が農村を搾取したことになった。

平均化を国是として来た日本にも二極分化の兆しが見える。ご本家のアメリカではとうに二極分化が始まっている。欧州は格差拡大を防ぐ度に社会主義的手法を取込んだ第三の道を模索している。世界の資本主義市場経済は21世紀初頭にして一つ

の転機を迎えているのかも知れない。

中国は広大な国土に巨大な人口を抱えた多様な大国である。中国の現状に適合した国家経営の手法が当然あるだろう。鄧小平は次の世代にその課題を引渡した。現政権はいよいよ本格的な農村の富裕化に打って出て、中国社会の安定的発展を計らねばならない。沿海地区の発展で稼いだ富を如何にして農村に還元するか、全人代の第一の結論は三農問題への対応、即ち“新農村”の建設である。これからは単なる市場原理中心的手法ではやって行けないだろう。政府が主導的に乗り出し、道路、鉄道、電力、エネルギーなどのインフラ建設、農村産業の効率化と再編成を計り、農村の増収をはかり乍ら、結果として内需の拡大を目指すということだろう。沿海地区が大きく外資に依存し貿易を中心に発展して来たが今後は限りなく内需を重視する方向へシフトする。沿海地帯で発展した第二次産業も労働力と市場を求めて内陸へ拡がって行くと思う。

一方で悪化が拡大している環境問題への対応、エネルギー多消費型産業構造の是正、量より質への転換、深刻な共産党員、官僚の腐敗の究明、共産党の存在価値の確保などが当面の急務である。

中国政府はどの様な民主的且つ合理的な手法でこの多様きわまりない大国を操縦して行くのか、中国の国家経営は更なる発展に向けて大きな節目を迎えた様だ。大国中国の帰趨は今や世界の政治、経済などあらゆる分野に重大な影響を与える。胡錦涛、温家宝政権は大きな正念場を迎えている。

日中関係も大きな転機にさしかかっている。政冷経熱も限界だ。一日も早く日中首脳会談を実現させ、日中間の当面の懸案、更にアジアの将来を見つめて日中間の戦略的提携を模索して行かねばならない。もう待ったなしである。

以上